

# おもしろ授業実践

○「オバQ」に愛着もわいてきて  
活動を重ねるにつれ、自分のすることが分かり、活動に自分から取り組める生徒が増えました。また、グループで制作したパーツを持ち寄って、大きなオバQの土台に貼り付けていくことで、毎回出来上がっていく様子を全員が期待して注目する様子が出てきました。「オバQ」を何度もなでたり、歌の一部を口ずさんだりする生徒も出てきて、愛着をもち楽しそうに活動する様子が見られました。



○単元を終えて  
宿泊学習では、全員で「かかしまつり」に飾られた「オバQ」を見に行き



○安心して活動できるように  
四つのグループに分かれてパーツ作りをしました。グループ分けでは、生徒同士が安心して活動できる仲間や活動場所にも配慮しました。素材は扱いやすさを考え、牛乳パック、卵パック、ペットボトルキャップ、花紙などを使用しました。

「実態把握」という言葉には、マイナスのイメージがあり、どうしても「できないこと」や「改善したい点」に注目してしまいがちです。しかし、生徒の「できること」「得意なこと」こそ、活動に生かせることがたくさんあります。そのことを大切にこれからも生徒と一緒に活動していきたいと思えます。



ました。見つけると嬉しそうに駆け寄っていく生徒がたくさんいました。「入選」の札を見て、また喜び合いました。学校祭である「むらとくまつり」では、「オバQ音頭」を披露するなど、本単元で取り組んだ「オバQ」は、生徒にとっても教師にとっても愛着のあるものになり、一年間のイメージキャラクターになりました。

四 おわりに  
本単元を計画していた頃、生徒達はまだ集団での活動が難しい実態で、どのように活動を進めていくかとても悩みました。十二名という人数での制作活動ということで、教員が集まり、生徒の実態把握に時間を掛けました。「Aさんは〇〇が好きだからならでさる。」「BさんはCさんとなら安心して活動できる。」と、話し合う時には、生徒の「できること」「好きなこと」を大切にしました。話し合いを重ねたことで、みんなが愛着をもつ「オバQ」が完成し、私にとっても忘れられない単元となりました。



## 中学部二年 生活単元学習 「オバQを作ろう」

―生徒のできることを生かして―



県立村山特別支援学校 教諭 菅野涼子

### 一 はじめに

本校は知的障がいのある児童生徒を対象とする学校です。教科等を合わせた指導のひとつである「生活単元学習」は、「児童生徒が生活上の目的を達成したり、課題を解決したりするために一連の活動を組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実践的・総合的に学習するものである」とされています。単元を考えるにあたっては、次のような点を大切にしています。

- ・イメージしやすく分かりやすいテーマであること
- ・一人一人が精一杯楽しく取り組める単元であること
- ・どの生徒にもできる活動を準備すること
- ・一定期間繰り返し取り組める活動内容であること
- ・生活年齢にふさわしい活動内容であること

### 二 単元について

本単元は、中学部二年生十二名（男子九名、女子三名）と教師六名で取り組みました。興味をもち、イメージをもって取り組めるように、生徒が春の運動会の看板のイラストに選

んだ「オバケのQ太郎」をモチーフにした立体（かかし）の制作活動に取り組みました。集中して取り組むことが難しかったり、気持ちのコントロールが難しかったりと実態は様々ですが、手を動かして活動することには興味をもって取り組める生徒が多くいます。また、作るものや自分の仕事を分かりやすく提示することで、自分で活動に取り組むことができる生徒も多いです。

制作した「オバQ」は、上市市で開催される「かみのやま温泉全国かかしまつり」に出品し、宿泊学習の時に、みんなで見に行くことを伝え、完成することを楽しみながら活動しました。

### 三 授業の実際

#### ○得意なこと、できることを生かして

活動を進めるにあたって、教師間で生徒の得意なこと、できる活動について話し合いを重ねました。テープで貼ることが得意な生徒、色を塗ることが好きな生徒など、生徒の得意なことを中心に話し合い、制作の手順を考え、材料を準備しました。また、毎時間「オバQ」の映像を見て気持ちを盛り上げてから、グループごとにパーツを制作し、全員で土台にパーツを貼り付けていくという活動を繰り返しました。

